

政策創造学ニューズレター

(愛称：テルマエ通信)

試合を重ねるごとに一致団結の精神が高まっていったサッカー日本代表。PK戦の末、惜しくも8強進出を逃してしまいました。日本中が感動に包まれました。

本研究科でサッカーと言えば、黒川研究室です。1カ月前の日韓戦が行われた日、中目黒の黒川邸でのサッカー観戦に参加させていただきました。ゼミの方々は、先生のお宅に到着すると、そろいのサムライブルーのシャツを着込み応援を始めました。先生の手料理(ちぢみ)をいただいたうえに、迫力がある解説をお聞きしたことは、とても貴重な経験となりました。先生は、いつか「ヨーロッパリーグにおける経済学」の講義を試みたいそうです。

さて、第6号では、多分野・異分野の研究書の集合体である本研究科の教員と在校生の書籍紹介をします。研究室紹介は、魅力あふれるまちづくりに向けて一致団結している黒川研究室(クロ研)です。(どうぞ、ご覧ください。)(那須田摩美)

在学生と教員の執筆図書特集

全国の推定売上部数に基づく2010年上半期の書籍売上をまとめた「2010年上半期本ランキンング」の発表、電子書籍端末の発売と出版話題の多い昨今、ニューズレターにおいても、書籍特集を組みました。

在学生の書籍紹介では、すでに出版経験がある方から4名の方に、出版までの経緯や苦労話などを書いていただきました。そして、教員の書籍紹介では、最近、出版された本から3冊を選び、編集委員が書評をしました。(那須田摩美)

在学生編

『起業家は社会の宝だ』福田稔著、ガリバープロダクツ、2008年、1500円＋税



2001年から2008年まで、中国電力が直営している創業支援施設「SOHO国泰寺倶楽部」で、インキュベーション・マネージャー(IM)の仕事に携わってきました。施設の立ち上げから手探りの運営を軌道に乗せるプロセスは本当に面白くてやりがいのある仕事でした。

この本はそのとき執筆した月2回発行の

メルマガコラムを少し読みやすく整理・改修したものです。IMは起業家の伴走者。コラムの最後には、いつも「起業家(経営者)は社会の宝だ」と思います。志を共有し、リスクを最小限に経営資源を最大限に、利益を生む仕組みづくりを応援する伴走者として、起業・経営革新を全力でサポートします」という言葉を置いていました。

起業をはじめ新しいチャレンジは、思い通りのことばかりではありません。自分自身もコラムを書くことで、ずいぶん励まされてきたと思います。

私は世の中で一番崇高な仕事は起業家であり経営者だと思っています。会社を経営していなくても立派な経営者です。なぜなら、自分という人財を社会や組織に派遣している「人生経営」のオーナーだからです。自立した豊かな人生の構築に、ビジネス・インキュベーションがお役に立ちます。インキュベーションを身近に感じていただければうれしいです。(福田 稔)

『メイド・イン・大田区―ものづくり、ITに出会う』改訂版、奥山睦著、静岡学術出版、2008年、1600円＋税



地元大田区の中小製造業の実態を、ITを切り口にレポートしました一冊です。初版は2005年で、2

008年に改訂版として再版されました。

約30か所の大田区を代表する中小製造業にインタビューをしましたが、インタビュー期間が約1ヶ月、1日3〜4件企業を回りました。アポイントをとりつけるのも大変で、同じ会社に20回以上電話をしたこともありました。また、最初はなかなか口を開いてくれなかった経営者も、取材が進むうちに堰を切ったように熱く自社の技術や人材育成のことなどを語り始める瞬間があります。そんな時は信頼が築けた、まさにインタビューア冥利に尽きる瞬間でした。

取材が終わってから自宅に戻り、夕飯を作るために厨房に立っている間は、ずっと取材したデジタルレコーダーをイヤホンで聞いて取材内容を反芻し、包丁を握っていた日々でした。そして家族が寝静まった午後11時頃から深夜2時頃までの約3時間が、執筆のために割ける時間でした。仕事と家庭生活のバランスに苦しんだ約一ヶ月半の執筆期間でしたが、今振り返るとすべて懐かしい良い思い出です。

ちなみに初版の単行本は、週刊ダイヤモンドの学者・エコノミストによって選定される「2005年ベスト経済書」の21位になりました。 ■ (奥山 睦)

『どうなる日本!! 静岡県!!』内山隆司著、静岡新聞社、2002年、

1400円+税

「映画タイタニック号」が人気を博した



頃、新春講演

会を開催しました。タイトルは「日本はあのタイタニック号と同じだ!!」でした。当時は、現職の県会議員と会計事務所の所長を兼ねていましたので十分な時間と資料が整わず、見切り発車で原稿を作りました。その時の資料を基にその後も講演会を開きましたが、数字の羅列が続きましたので、これは文書化した方が伝わり易いと考えて本に纏めたのです。

静岡新聞社が自費出版でも、書店の店頭と並べてくれるとの事でしたので、三千部発刊しました。売れ残れば引き受けるつもりでしたが、静岡、浜松の著名人、有力者の方にも随分買って頂いた事を知って、恥ずかしくもありがたい気持ちで一杯でした。今は現役の学生ですから講演はあまりしていません。

この本は、県議会で私が質問した議会審議録や講演録、書き下ろしの原稿で構成しました。この次は、もう少しましな原稿を作りたいと思っています。 ■ (内山隆司)

『中東を理解する 社会空間論的アプローチ』水口章著、日本評論社、2010年、2400円+税

本書は、空間編成の経済理論で有名なデヴィッド・ハーヴェイの、世界空間は同質

頃、新春講演会を開催しました。タイトルは「日本はあのタイタニック号と同じだ!!」でした。



て考察したものである。

とはいえ、もちろんハーヴェイの空間分析には遠く及ばず、E・ソジャ、S・サツセン、D・マツシー等の空間に関する著作と悪戦苦闘する日々が続いた。ある日、新聞の書評欄を一緒に見ていた妻がS・ブレイクスリーの『脳の中の身体地図』って面白そう、とつぶやいた。早速購入してみた。そのおかげで、中東の人々の「社会化」について描くことをイメージし、人間の意識・行動に注意を払いながら書き進めることができた。妻に感謝、である。

また、編集を担当くださった日本評論社の守屋克美氏からは、内容、日本語表現ともにさまざまなお言葉をいただいた。振り返れば厳しかったが充実した日々だったといえる。そして、改めて人に支えられ人生を送っていると感ぜさせてくれた時でもあった。

最後に、本書は中東の入門書として書いたものであるが、イスラム、石油、戦争、歴史といったオースドックスな観点からの記述は少ない。日本人がアンカーリングしている「中東」イメージを僅かでも変えることができれば、と思いつつ、筆を走らせた半年であった。 ■ (水口 章)

教員編

人口負荷社会の先進国となるには

『人口負荷社会』小峰隆夫著、日本経済新聞出版社、2010年、850円+税



人口予測は相対的に不確実性が小さく、将来展望の基盤となる。言い換えれば、人口は確かな未来を表しているということである。本書のタイトルのとおり、日本は既に人口負荷社会に入っており、その負荷は今後ますます大きくなっていくものと予想されている。人口負荷社会とは人口が経済社会にとって大きな負荷となっていく社会であり、それを一言で表した言葉が本書のキーワードとなっている「人口オーナス」である。本書は、この人口オーナスという人口構造の変化が経済社会に及ぼす影響を経済学的な視点から分析する。さらに、人々の生活をより豊かなものにするという視点から日本社会の歪みを指摘し、構造改革の必要性を指摘している。人口オーナスの悪影響を最小限にとどめ、さらには人口オーナスそのものを小さくするにはどうすればよいかと問題が検討される。人口オーナス問題こそが長期的に見た日本の経済社会にとっての最大の課題であることが示される。日本は世界で最も強く人口オーナスの影響を受ける国である。果たして日本は人口オーナス社会のリーダー

ングカントリーになりうるのだろうか。■

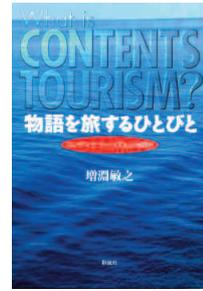
(堀江慶子)

物語を我が街に

『物語を旅するひとびとーコンテンツ・

ツーリズムとは何かー』増淵敏之著、

彩流社、2010年、2000円＋税



「コンテン
ツ・ツーリス
ム」……この
言葉になじみ
のない方も多

いであろう。しかし、そうした方も大好きな小説や映画、作家、そしてマンガやアニメなどに縁のある土地を訪ねたり、旅行したりといった経験はあるのではないだろうか。映画や小説などのコンテンツ作品によって定着した、地域の「イメージ」・「物語性」を観光資源とし、巡礼者としての観光客を招き入れること、それがコンテンツ・ツーリズムである。

現在、この新しい観光形態が地域活性化の面で注目をあびている。というのも、国土の均衡ある発展によってアイデンティティを失った地域に、新たにイメージを与えブランド化する上でコンテンツ作品の存在が不可欠だからである。また、観光客の嗜好が多様化したことで観光形態はマス・ツーリズムからプライベート・ツーリズムに移行しており、個人の趣味や関心に根ざしたコンテンツ・ツーリズムはこうした新たな

な傾向に合致しているのである。

本書では、こうして注目を集めるコンテンツ・ツーリズムの事例を数多く紹介している。『北の国から』や『冬のソナタ』などのドラマを扱ったもの、司馬遼太郎や藤沢周平といった作家・小説を扱ったもの、そして、地方の小さな町に衝撃をもたらした『らき☆すた』のようなマンガ・アニメを扱ったものなど……多様な事例によりコンテンツ・ツーリズムの奥深さが味わえる。この土地と作品にはそんな思惑があるのか。その土地のイメージはこうやって形成されたのか。本書で驚きを覚えた後は、貴方も自分の周りで地域イメージに関わっているようなコンテンツ作品を探してみたいかがだろうか。■

(横井友美加)

「最近の若者は……」は無くなるか？

『若者のトリセツ』岩間夏樹著、生産性出版、2009年、1500円＋税



大学院では
統計学の教鞭
をとられてい
る岩間夏樹先
生が、昨年末

に「最近の若者」についての新刊を出されたので読んでみました。岩間先生は社会調査の研究者として若者研究に携わり、毎春恒例の若者ネーミング（今年「ETC型」）の選考委員もされています。

厚生労働省のニート支援政策にも加われ、

メディア言説によって過大・過激に伝えられる若者像を、統計学的・客観的な分析から若者の真の（平均的な？）姿を明らかにしてくれそうです。本書を読めば、援助交際が実は極少数のケースで、通り魔殺人のような少年犯罪が増加ではなく減少傾向にあることも理解できます。そうした冷静な社会調査の視点を与えてくれるのが本書の利点です。

本書では我が国で最長の若者意識調査である日本生産性本部の「働くことの意識調査」の分析も行い、若者の働くモチベーションの変化が平明に解説されています。これによって40年にわたる変化を俯瞰してみると、企業が新入社員に与えてきたものが、社会変化に応じて変わってきたことが浮かび上がります。それは「身分(リッチ)」としての報酬・社会的地位に始まり、「自分(チャレンジ)」のやり甲斐・自分らしさへと変わり、そしてこれからは「気分(エンジョイ)」を充足する人間関係・社会貢献意識となり、若者の内的モチベーションを引き出す方向に向かっていることがわかります。

「最近の若者は……」という言葉を出したら年をとった証拠だそうですが、その若者を理解するためには、若者を取り巻く社会の変化を一緒にみるのが大切です。そうすれば最近の若者を創り出したのは、実は大人たちだとわかります。若者との付き合いに悩み出した方には一読をオスス

めます。

なお、岩間先生の最新刊として、こうした若者の意識変化を解き明かした『若者の働く意識はなぜ変わったか』（ミネルヴァ書房）もこの4月に発刊されました。この分野にご関心のある方は、是非ご覧下さい。■

(鈴木美伸)

プログラム紹介③

都市政策創造群

都市政策プログラム

黒川研究室

今回は、研究室の紹介形式を少し変えて、黒川研究室がどんな研究室なのか要素分析しつつ紹介してみようと思います。大まかな要素として先生、メンバー、研究室スタ



黒川研究室の仲間たち

イル、分野、興味に分類してみました。
先生

黒川先生は、J. M プキヤナン先生(1986年ノーベル経済学賞受賞)や加藤寛先生の愛弟子であり、公共選択論の日本における第一人者として日本を代表する経済学者であります。公共選択学会や日本計画行政学会では会長を歴任されてきました。メンバー

本研究室には、修士13名(1年7名、2年9名)、博士2名が所属しています。黒川先生のみならず、現在、様々な分野の第一線で活躍されていらっしゃるOB・OGの方々も参加して戴いております。

研究室のスタイル
主に、各自の研究課題、先生やOB・OGの方々が持ち寄った資料等について議論し合います。周りの方々の最先端の研究や知識を自分の知識(財産)に変えていくことを目的とし、議論のレベルを高めていく方法でゼミを進めています。そして、常に活気ある議論や活動の場を創り出してくれるのが黒川先生です。

分野
私たち研究室での共通テーマとして、人の移動や東京の郊外に関する研究をおこなっています。人口減少社会といわれる中で、人口が増える地域はどういった地域なのか。どうして人口が増えるのか。また、東京の郊外では以前と比べ人の移動はどういった変化があるのか等を考察します。また、2

008年度から東京郊外である町田市の人口や財政に関するプロジェクトも進めております。町田市などの東京郊外地域ではこれからのような利用が地域の競争力を高めていけるのでしょうか。各自のテーマとしては都市政策が挙げられます。
興味

本研究室では合宿等は行っておりませんが、その代わりにポトラック・パーティー(各自が手作り料理を持ち寄る食事会)を黒川邸にて開催することや、時折、先生と一緒に釣りやサッカー観戦に行くこともあります。ゼミ生の共通の趣味としては釣りやサッカー観戦、料理といったところでしょうか。

読者に向けて
黒川先生は、大学院生には常に「面白い論文を書け!つまらないものは見ない!」とおっしゃっています。黒川先生の言葉からも読者の皆様には、現在興味や疑問を持たれていることについて、研究や調査を通じて現在の以上の興味や疑問、真実や新しい発見をして頂きたいと思う次第であります。そして、読者の皆様と共に研究ならびに勉強出来る事を楽しみにしております。

(井嶋充憲)

新着情報

シンポジウム・研究会等

7月15日(木)

第8回サス研フォーラム

「食料のサステイナビリティ」

時間―18時30分〜20時00分

場所―法政大学市ヶ谷キャンパス

富士見坂校舎1階 遠隔講義室

参加費―無料

主催―法政大学

サステイナビリティ研究教育機構

問い合わせ―法政大学サステイナビリティ

研究教育機構事務局

E-mail: sus@hosei.ac.jp

研究大会

8月7日(土)・8日(日)

日本地域政策学会 第9回研究全国研究

神奈川大会

大会テーマ「地域主導の観光政策―国際化と文化を軸にした地域づくり―」

場所―桜美林大学淵野辺キャンパス

主催―日本地域政策学会

問い合わせ―日本地域政策学会事務局

E-mail: ncs-gakkai@tcue.ac.jp

学内イベント

7月31日(土)・8月1日(日)

「研究成果中間発表会」

編集後記

政策創造研究科メンバーによる著書特集いかがでしたでしょうか。私は、教授や講師の先生方だけでなく、学生の方もこんな本を執筆していらっしゃるとは知らなかったの、とても驚きました。皆さん、気になる一冊がありましたら是非書店へ行ってみてください。

さてさて、次回も書籍つながりで図書館特集を行います。図書館の有効利用できていますか。論文執筆や調べ物には欠かせない、国会図書館、法政大学図書館などの情報をお届けしますので、どうぞお楽しみに。

(横井友美加)